

館を京都に設置してもよいと思われる。京都国立博物館、国立近代美術館、京都会館、国立京都国際会館などに加えて、学問の殿堂、国立京都図書館がこの都にあるべきではなかろうか。京都大学図書館はその前身でありたいものだ。

利用効率の高い図書館とはこんな風にありたい。

1. 文献相談室へ入る。そこには専門別文献相談係がいる。その人達に必要な文献を口頭で尋ねる。相談係はそれに応じて手元のタイプをたたく。タイプはただちに目的の文献の分類番号をカードとして打ち出す（このときに同文献の在庫の有無も合せて確かめる）。

2. 打ち出されたカードを図書貸出室へ持参し、図書借出カード（クレジットカードのようなもの）を添えて同カードを貸出係に提出する。目的の図書はその後ただちに入手する。

3. 文献複写室へ行く。再び図書借出カードとともに必要文献のコピーを依頼する。数分でコピーを入手し、図書館を出る。

このような図書利用システムはできないものだろうか。図書カードの検索、図書借出カードの記入などは利用者にとっていかに面倒なことか。即座に文献コピーが得られないことはいかに不便なことか。総合科学（農村計画論）を専攻する筆者などが求める文献は非常に広範囲にわたり、各学部図書館に散在している。しかも現在の文献コピーは時間がかかりすぎる。全くお手あげである。

そういえば、2週間ほど前に依頼した文献コピーがいまだに手元に入っていない。もっとも「学問とはのんびりやるもの、それでよいのだ」という教訓かも知れない。

人文科学研究所 助教授 松 尾 尊 兎

京大創立70周年事業とかで体育館が建つらしい。いったい大学とは何をするとところかといいたくなる。学生の肉体的な健康のめんどろまでみる前に、もっとさきになすべきことは、いくらでもあるはずだ。ちょうど20年前、この大学に入学したとき、付属図書館は、いずれ増築される予定ときかされた。現状よりも何階か上に重ねるように設計されているというのだ。ところが一向に実現しないのである。

閲覧室は大入満員、いつの間にか教官閲覧室は消滅してしまった。書庫にいたっては論外である。私のように日本の近代史を勉強しているものには、新聞は不可欠の資料だ。京大には、かなりのコレクションがある。ところがこれは、教育学部の裏手にある土蔵の中に保管されている。請求すると係の人は雨が降ろうが雪が降ろうが、重い新聞綴を本館の二階まで運び上げねばならぬのだ。おのずと新聞も傷む。係の人に気の毒で、近頃はなるべく京都府立資料館で見るようにしているが、ここでは種類に限定がある。とにかく早く増築を行なって、新聞などは書庫内で読める設備にしてもらいたい。

どこの部局でも書庫がせまくて困っている。利用度の少ない雑誌などは、皆、先述のお蔵入りである。こういうものも付属図書館に一括収容したらどうだろう。近頃各学部で学生のための研究室をよこせという要求が出ているようだ。こういう声が出るのも一つには付属、各学部とも学生の図書閲覧室がせまいのと、設備がよくないからであろう。

「大砲か、バスターか」という古い設問がある。「体育館か図書館か」。常識ある大学人の答えは明らかだろう。「体育館も図書館も」という線で行こうとしているのだ、と大学の幹部諸公はいわれるかも知れぬ。それならば、ことばでなく実行で示してもらいたい。部局の図書館統合の話があるようだが、設備の点はくれぐれも気をつけてやってもらいたい。そして付属図書館の増築も別個に実行してほしい。

「大学改革にさいし図書館にのぞむ」というテーマだが、「大学当局にのぞむ」になってしまった。図書館の人々にたいし、私は何ものぞまない。劣悪な勤務条件でしかも陽の当ら

ぬ場所で黙々と職務にはげんでおられる人々には、ただ感謝あるのみである。

文学部 助手 都出比呂志

図書館改革のために利用者の声が、この欄で、いくつかとりあげられた。それらは、すべて京大内の人の声である。もちろん、京大図書館の改革が問題にされているのだから、それは当然であろう。

しかし、一度京大人を離れて一般市民になったつもりで、ながめれば、京大図書館はどう見えるだろうか。

京大図書館創設の際には、民間から図書寄贈の援助があり、その利用も一般市民に開くという精神で出発したと聞いているが、いまの現実はどうであろうか。

館の利用規定は、確かに学外の人にも利用できる仕組になっている。ところが「部局長の許可が必要」という但し書きがついている。もちろん、「部局長の許可」は一つの「形式」である。この規定を撤廃して、図書サービスを、無統制で、無責任な体制にせよと言いたいわけではない。だがこの「形式」の背後には、案外かなり重い「実質」がかくされているのではないだろうか。

私は、図書館の利用者であると共に、助手として研究室図書利用サービスの仕事の一端を受け持っている。他大学や民間の人が、研究室の図書を利用にこられた時、できるだけ便宜をはかりたいつもりでいるが、それに追われていたのでは研究が阻害される。するとつい、おっくうげな対応をしがちになる。研究室図書を例にあげたのでは特殊かも知れないが、問題の大小はあれ、この矛盾は京大内のどの図書館にもあるのではなからうか。大学外の人も利用し易く、かつ、便宜をはかる人の負担をも軽くしようとすれば、結局は人員と設備をふやすしかないだろう。図書館「近代化」のためにコンピューターの導入も結構だ。しかし、その「合理化」によって、従事者の人員を減らし、利用しにくいままの帝国大学図書館の現状を固定するのではなく、人員と設備を拡充して、まさに、「大学の外へも開かれた」ものへの改革が必要なのではないだろうか。

化学研究所 助手 植村 栄

図書室といえば入学以来、教養部、各学部の教室、さらに研究室と時と共に利用する場所こそ違え随分とお世話になって来たが、それぞれが中央図書館と結び付いているということ、あるいは全学の図書施設の一部なのだということを感じたのは単行本の受入手続きの度にその本が一時預かりされている時である。随分と時間のかかるものですね。コンピューターをいれて迅速になるものならやって頂き度い。次に感じたこと。古い雑誌の表装、これは相当服をよごすものが時にありますね。貴重なものですから表装し直して後輩のため保存して頂き度く思います。古いものといえばバックナンバー、もっと充実してほしく思います。が、こういうものや学位論文など全てマイクロフィルムに切替えればいいですね。

以上この10年間の経験から具体的に改良して欲しい点ですが、意外と少ないものですね。

こんな小さな点でも実行しようとすれば予算が相当かかるでしょう。大学改革には予算の裏付けが必要な面が多いですが、それ以上に各人の意識が変わらない限り進めない。しかし今回のライブラリーシステムで改善しようという——これを改革というのかどうか知りませんが——実際的な問題の場合はまづ予算の裏付けが一番大切なことでしょうね。予算の額即改善の幅ということになるのではないのでしょうか。大学改革担当文部大臣も留任になったことだし直訴でもしますか。いやこれは大蔵省の問題ですね。館長さん、総長さん頑張って下さい。